

花嫁

時代が変われば、流行も変わります。

和装の花嫁のヘアスタイルも現在では、純和風から洋風にアレンジまで様々。和装の花嫁の髪飾り、帽子などはそのように変化してきたのでしょうか。

◆花嫁の髪かざりは何というの？

白無垢の花嫁の髪かざりといえば、鬘甲。現在では、この髪かざりを単に筭(こうがい)や、簪(かんざし)と呼んでいるケースも増えていますが、本来、簪と筭というのは別であり、それぞれ用途も違っていました。花嫁の髪かざりを詳しく言えば、櫛と簪と筭となります。

◆筭(こうがい)はかゆい時の頭掻きだった？

民族的に見てみますと、筭をさすことは大人の女性であるとされていました。

元来、先方の尖っている筭はかゆい時に髪を掻く「髪掻(かみかき)」からきているという説があります。

主な挿し方については2種類あり水平に挿し髪をまきつけ、乱れた髪を整える道具として利用されたケースと江戸時代以降、装飾的に利用されたケースがあげられます。材料も竹、鯨のひげ、鬘甲を使いそれに蒔絵(まきえ)を施し、芸術的価値の高いものになっていきました。

◆簪(かんざし)は耳掻きのために生まれた？

簪の源流は筭に耳掻きをつけたものです。どうして、耳掻きをつけるようになったのかについては、様々な説があります。まず、贅沢禁止令から逃れるためという説。江戸時代には贅沢禁止令というものが山のように出されており、金をかけたきりびやかな簪もいつ法度(はつと)がでるのかかわからないため、耳掻きをつけ「これは贅沢品ではありません。耳掻きで実用品です」と言い訳しようとしていたようです。

もうひとつ貞亨頃、高橋宗恒という人がある商人に耳掻きをつけると、流行するであろうと助言したという説。商人が試しに作ってみたところ世に流行したとされています。現在の花嫁の簪にも先端が耳掻きのように曲がっています。

◆簪(かんざし)にはどんな種類があるの？

正徳から享保(1711~1735)

銀で作った団扇<うちわ>や扇子の形をつけていました。

元支から寛保(1736~1743)

舞妓仲間の中で流行した、金銀の梅の枝につけた短冊がゆれて美しい「花ざし」さらに鎖によって揺れる美しさを強調した「ピラピラかんざし」色のついた布で造花をつけた「造花かんざし」がありました。

◆簪(かんざし)の由来は？

古代には生花を髪にさし、これを挿頭花(かざし)、うずと言っていました。奈良・平安時代には釵子(さいし)といい金、銀、銅などの棒を折曲げた二本足のものでした。鎌倉・室町時代の女子の髪かざりとして発展し江戸時代に日本髪結びが複雑になるに合わせて、櫛、筭と併に華やかになってきました。

◆綿帽子の由来は？

白い布をかぶることが木綿<ゆふ>かざらとって身体を浄化する身体を神聖化するという意味をもっており、そこから災難を避ける、魔避けになるようかぶった物が花嫁の綿帽子に変化したと思われます。

婚礼衣裳Q & A

Q. 鬘甲のかんざしは長生きできるようにという意味があるのですか？

A. 長生きというよりも、嫁姑の中がうまくいくように、例えば姑につつかれても、亀のように一度は首(意見)をひっこめなさいという意味があると言われています。